

# 〈国〉作りの物語

——『古事記』における〈国〉作りの内実——

後山 智香

序

一、〈国〉の意味

二、イザナキ・イザナミの〈国〉作り

三、オホクニヌシの〈国〉作り

四、「葦原中国」という〈国〉作り

結

『古事記』における〈国〉作りは「天つ神」による一大事業であるが、本文中にその内実の明確な記述はみられない。ゆえに、従来多くの研究者がこの問題に対峙し、様々な議論がなされてきた。本論は、それらの研究成果を取り入れながらも、従来の研究史とは違う観点からの考察を行うものである。具体的には、〈国〉作りの対象である〈国〉からこの問題を取り扱うことで、〈国〉作りの内実について新たな視点を提示することを目的とする。

## 序

其の大刀・弓を持ちて、其の八十神を追ひ避りし時に、坂の御尾ごとに追ひ伏せ、河の瀬ごとに追ひ撥ひて、始めて国を作りき。

右の引用は根之堅州国段の一文である。『古事記』において〈国〉作りといえはオホクニヌシの行為であるというのが一般的な解釈だろう。本文中には明示されないが、それが「葦原中国」に関わる行為であることはササノヲによって見出された「葦原色許男」というオホクニヌシの神性によって説明される。また、同じくササノヲによって「大國主神」という神性が与えられたことで、〈国〉に関わりを持つ存在であることが示された。つまり、『古事記』はオホクニヌシを「葦原中国」に関わる〈国〉作りを行う存在であると明確に位置づけているといえよう。

ところで、〈国〉作りと同義の言葉が、根之堅州国段よりも早く黄泉国段において見つけることができる。

伊耶那岐命の語りて詔ひしく、「愛しき我がなに妹の命、吾と汝と作れる国、未だ作り竟らず。故、還るべし」とのりたまひき

このイザナキのいう「作れる国」とは何をさしているのだろうか。本文では、イザナキはイザナミと共に「天つ

神」の「言依」によって「ただよへる国」の「修理固成」を実行しており、その〈国〉とは「ただよへる国」をさすことが理解されよう。

この「ただよへる国」について、本居宣長は「未国と云物はなき時なれども、出来て後の名を以て、其初をも加此国とは語り伝しなり」といい、また、神野志隆光は「タダヨヘルだけの「国」のあるべきすがたは、すでに「天神」のもとに掌握されているとする。すなわち、〈国〉作りとは「天神」によってすでに「掌握」された〈国〉の姿を實現していく行為のことをさすとされている。

しかし、そもそも「修理固成」や「始作国」などの〈国〉作りとは〈国〉に対してどのような行為を行うことなのだろうか。また、〈国〉には「ただよへる国」から「葦原中国」、そしていづれ「天下」となっていくという名称変更の問題も存在する。なおかつ、この行為は、いつどのようにして終了した旨の明確な表現は見られない。それはその行為が終えたという意味を内包する表現、あるいは文脈が本文中に存在していたということになる。

そこで本論では、それぞれの〈国〉作りが、どのような作用をもたらすのかということとを、その対象となる〈国〉を中心にみていく。また〈国〉を明確にすることで『古事記』における〈国〉作りの物語の範囲、内実を規定する。

そこで、まず本文中に登場する〈国〉という言葉の意味を次節において探ってみよう。

## 一、〈国〉の意味

『古事記』の「国」の例は三百を超える。そのうち、百例以上が出雲国や伯伎国などの行政区間上の〈国〉をさす。しかし、「高天原」や「黄泉国」、「根之堅州国」、「葦原中国」などの世界をいう〈国〉の例も多い。また、後述するが、〈国〉生みのように大地を〈国〉とする場合もある。それ以外に、〈国〉譲りの際、タケミカヅチの言葉にある「汝がうしはける葦原中国は、我が御子の知らさむ国」の〈国〉は「葦原中国」という世界をさすが、「うしはける」や「知らさむ」という政治色の強い言葉と同時に用いられることで、この〈国〉は政治的・権力的な意味合いが強められている。『古事記』の〈国〉はひとつの意味でもって使用されていたわけではないことがわかるだろう。

古代の〈国〉の意味に関して、池辺弥<sup>4</sup>は「奈良時代以前の史料に現われるクニは現在の我々が通念として持つているクニの概念とかなり大きな相違がある」とし、『日本書紀』五段一書第十一のツクヨミによる穀物起源神話の例を引用して、次のように述べる。

海からは大小の魚類、山からは山の狩猟による大小の

獣類が出されるのに対し国からは飯、即ち穀物という田畠からの農産物があげられている。すなわちこの「国」(クニ)とは海や山に対する平野、更にその農産物を産出する耕地すなわち田畠をさすものであった。また、「現在クニについて持たれているような政治的な内容を含まない単なる土地や、それよりも一步開発された、耕地でないしは田畑といったものをクニと称した」としている。

そこで、『古事記』の〈国〉を分類すると、a「土地」b「世界」c「行政区間」d「人の住む地」e「政治権力の及ぶ地」f「国家」g「田畑」となり、多くの意味が包含されていたことがわかる。

それでは、「修理固成」される「ただよへる国」はどのような〈国〉をさしたのであるか。それを考えるうえで、最初に考えなければならないのは、〈国〉作りが『古事記』上巻の一大事業である点だ。

〈国〉作りという行為は「天つ神」の主導のもと行われる。最初の〈国〉作りの記事とみられる「修理固成」は、「神世七代」誕生後すぐの位置に置かれ、神が能動的に行動した最初の記事となっており、その重要性は明らかである。つまり、『古事記』上巻の物語は〈国〉作りから始まるのだ。

それは『古事記』の「天つ神」にとって、〈国〉作りが他のなよりも優先されていたからに他ならない。その対象の〈国〉が「葦原中国」だから優先されるのではなく、「葦原中国」が将来、天皇の支配する「天下」となるために、優先されるのである。

宣長の「出来て後の名」や、神野志のいう「天神」のもとに掌握されている「あるべきすがた」とは「天下」をいうのではないだろうか。「葦原中国」はあくまで「天下」への過程にある〈国〉であり、後の「天下」を中心に考えるべきなのだ。「天神」によって「掌握され」た姿へ向けて〈国〉が完成されるならば、それは「天下」をさしているべきであろう。「ただよへる国」は、つまり後の「天下」をいったことになる。

ところで、以前、拙論<sup>6</sup>において、『古事記』は「黄泉国」にはイザナミを、「根之堅州国」はササノヲ、「海原」にはイナヒ、「常世国」にはミケヌなど、〈異界〉という〈国〉に「天つ神」の系譜を派遣するという形式を持つことを論じたが、それは〈異界〉を「天つ神」の支配下に置くことで、「天つ神」＝「高天原」の支配力を強めるという効果を持っていた。また、それぞれの〈国〉は支配者を得た時点で役目を終了し、以降その〈国〉を登場させないという形式も併せ持つ。それぞれの〈国〉の役目とは「高天原」

の支配を強め、ひいてはその支配を直接受ける「葦原中国」という〈国〉の存立を保障することであった。では、その「葦原中国」の役目とはなにか。

「葦原中国」は天孫降臨によって支配者が配置されるが、その後も「葦原中国」という〈国〉が登場する。それは、その役目が終了していないということである。「葦原中国」が姿を消すのは「天下」登場後、「天皇」という支配者が配置された後のことである。つまり、「天皇」による支配がなされて「葦原中国」という〈国〉の役目は終了するのだ。

では、その役目は何か。前述したように、『古事記』上巻は「葦原中国」を中心に物語を進め、「天つ神」による一大事業として〈国〉作りを語る。それは後の「天下」を作るということであり、「葦原中国」を作っていくことでもある。「葦原中国」という〈国〉の担う役目は、「天下」という〈国〉になっていくことなのだ。つまり「葦原中国」という名称こそ〈国〉作りそのものをさすのである。「葦原中国」という〈国〉は『古事記』上巻の〈国〉作りの文脈において、非常に戦略的に用いられていた。

以上の点から、「葦原中国」の役目は神武記の「畝火の白橿原宮に坐して、天の下を治めき」という一文の登場によって終了したとすることができよう。また、「天の下を

治めき」とあつてから、初めてカムヤマトイハレビコが「天つ神御子」から「天皇」と表記される点も留意しておきたい。前述したように「天皇」という支配者が置かれることで「葦原中国」の登場はなくなる。それは、〈異界〉の〈国〉の形式を「葦原中国」に組み込むことで、その役目の終了を示すものだった。

〈国〉作りの〈国〉とは「天下」であり「葦原中国」でもある。つまり、「修理固成」も「始作国」もその対象となる〈国〉は同一のものをさしたのだ。では、その〈国〉作りの実態はどうなのだろうか。

## 二、イザナキ・イザナミの〈国〉作り

イザナキ・イザナミによる〈国〉作りは、「天つ神」が次のように「言依」す形で始まる。

是に、天つ神諸の命以て、伊耶那岐命・伊耶那美命の二柱の神に詔はく、「是のただよへる国を修理ひ固め成せ」とのりたまひ、天の沼矛を賜ひて、言依し賜ひき。

ここで「言依」をする「天つ神」は明記されないが、それは「天つ神」の特定が重要視されていないためと考えられる。少なくとも、この箇所までに登場する、五柱の「別天つ神」、イザナキ・イザナミを除いた「神世七代」のこ

とをさすのは間違いない。重要なのは、「高天原」という天地初発の時から存在する高次元の世界に成った神が「修理固成」を命じているということである。高次元の存在の直接的関与として、「修理固成」がなされることで〈国〉、つまり「天下」は特別性を増すこととなる。また、将来の「天下」である〈国〉を「修理固成」したことで「高天原」という高次元の世界はより絶対的な存在となり、〈国〉と相互に補完し合う関係になっていくのだ。

二神は「天つ神」の「ただよへる国」の理念のもと、まず「国土」を生み、次に「神」を生む。「神」生みの途中で亡くなったイザナミを追ってきたイザナキは「吾と汝と作れる国、未だ作り竟らず」と、〈国〉作りが途中であることを述べる。ここにかけて、二神の行為が〈国〉作りであったと示される。つまり、ここでようやく「修理固成」とは〈国〉作りのことであると明確にされるのだ。また、イザナキのいう「国」は、「言依」である「修理固成」にかかる「国」であり、それは「ただよへる国」と同様の、将来「天下」となる〈国〉をいい、「葦原中国」のことをいったのである。

「修理固成」は前述したように〈国〉作りであり、「葦原中国」、「天下」の〈国〉作りであるゆえに、その範囲に關して従来様々に論じられてきた。「修理固成」を命じら

れたイザナキが黄泉国段で発した「作れる」という「作」と「修理」のずれの問題も含め、多様な意見が出されている。

まず、宣長は『古事記伝』において「修理は、たゞ作と書と同じことなり」として「修理」と「作」を同じ行為とみなして論じ、「経営成竟たまふは、大汝少名毘古那神のときなり」とその範囲をオホクニヌシの〈国〉作りまでかかるものとした。範囲としては神野志も同じ見解を示すが、「修理」の意味を「あるべきすがたにとのえる」とし、「タダヨヘル」〈国〉の「修理」の物語として、イザナキ・イザナミの「生」<sup>11</sup>「ヘウム」物語とともに、「作」において大国主の物語がくみこまれる。「修理」による二つの物語の定位」として、宣長の「修理」の見解を否定した。

同じく「修理」に着目した山崎かおりは「修理」に政治的に治める意味が含まれているとしており、範囲を「国作り神話までとするのは不足で、国譲り・天孫降臨神話までを考えるべき」とする。また「修」にシラスの訓が当てられている諸本もあることから、天皇の統治を念頭に置いているとした。

一方で、金井清一<sup>9</sup>は神野志論の「天神諸」によって掌握された「あるべきすがた」へと〈国〉が作られていくという点を評価しつつも、オホクニヌシによる〈国〉作りは、

「天神諸」による「修理固成」とは関わらないものとして、その範囲を「天神諸」の掌握する「国」のあるべき姿は、かくして理念的には天皇家の続く限り続いて実現が目指されるもの」とした。

菅野雅雄は「天神に〈修理固成〉を命じられ天沼矛を賜わった岐美二神は、命に応じて淤能碁呂嶋を成していて、十分に命を果たしている」として範囲をオノゴロ島を生むまでとした。

以上のように、様々な意見がだされ、今現在決着のついていない論議ということがわかるだろう。<sup>11</sup>しかし、いずれの論も注目しているのは「修理固成」という言葉であり、その作られていく〈国〉への注目度は少ない。

イザナキ・イザナミによる「修理固成」は「天つ神」の「言依」をうけ、最初に天の浮橋からオノゴロ島を見出すことにはじまる。

是に、其の妹伊耶那美命を問ひて曰ひしく、「汝が身は、如何にか成れる」といひしに、答へて白ししく、「吾が身は、成り成りて成り合はぬ処一処在り」とまをしき。爾くして、伊耶那岐命の詔ひしく、「我が身は、成り成りて成り余れる処一処在り。故、此の吾が身の成り余れる処を以て、汝が身の成り合はぬ処を刺し塞ぎて、国土を生み成さむと以為ふ。生むは、奈何

に」とのりたまひしに、伊耶那美命の答へて曰ひしく、  
「然、善し」

二神は身体問答をした後、「国土を生み成さむ」とする。それは、この時点でいまだ「国土」がなかったことをあらわす。あえて「国土」とすることによって修理すべき〈国〉は「国土」ではなかったことを表現するのである。

問答の後、二神は大八島国を生み「国を生み竟」えたとする。しかし、それは「生」ことが終了したのであり、出来たと述べてない。実際、二神の行為は「作れる国、未だ作り竟らず」となるのであって、生み終えたからといって〈国〉Ⅱ「天下」の完成がなされていないことは明白である。また、「国を生み竟」えたという表現には、イザナキによる「国土を生み成さむ」という宣言が前提にあり、ここではその〈国〉は「国土」と解釈すべきなのだ。

ところで、この「生」と「作」という別の言葉で表記された〈国〉作りには当然ずれが生じる。この点に関して神野志は「生む」と「作る」とは別物」としたうえで、次のように述べる。

タダヨヘルというのは、まさに混沌、クラゲの如く、「浮脂」の如く、「国」となるべき世界（正確にいえば、世界以前のもの）はある。そこに、「嶋」や「神」を「生」み出すことをイザナキ・イザナミはおこなつ

た。行為としては「生」、それを、「国」としての形をこしらえるという点からいえば概括して「作」というべきものである。

氏は「タダヨヘル」〈国〉への行為という意味で「修理」という〈国〉作りの中に二神の行為は包含されとした。すなわち、「生」「作」の対象が「ただよへる国」であるならば、それは「天つ神」の命じた「修理固成」という〈国〉作りとして捉えるべきなのだ。

前節で述べたように、〈国〉には複数の意味が含まれている。イザナキ・イザナミによる「修理固成」という〈国〉作りは「ただよへる国」である「葦原中国」への行為であり、ここで「生」まれるのは「葦原中国」の「国土」なのだ。二神による〈国〉作りは「国土」を「生」み、「神」を「生」んだ時点で終了したのである。

### 三、オホクニヌシの〈国〉作り

では、同じ〈国〉を対象とするオホクニヌシによる〈国〉作りはイザナキ・イザナミとどう異なるのだろうか。山崎はオホクニヌシの〈国〉作りは「天神の一人の指示を受けているという点、修理固成と無関係ではない」としながら、「大國主の国作りは、修理固成の一部ではあつても修理固成の「命以」を達成したとは考えにくい」とする。



また金井は「<sup>16</sup>大国主神の「国作り」は非正統なもの、「天神諸」の命じた「修理固成」とは異なるものである」とする。

しかし、やはり「修理固成」を命じたであろう「天つ神」の一人、カムムスヒが「汝葦原色許男命と兄弟と為りて、其の国を作り堅めむ」とスクナビコナに命じた意味は無視できない。

オホクニヌシの〈国〉作りは、スサノヲによって「大国主」という神性を与えられたことで「始めて国を作りき」となる。イザナキ・イザナミの〈国〉作りは「ただよへる国」の「修理固成」であり、それは「天下」となる〈国〉を「生」み出していく行為であった。一方、オホクニヌシは「天神諸命以」をうけたわけではなく、スサノヲによって見出され、カムムスヒによって容認される行為であり、イザナキ・イザナミの〈国〉作りとは異なつて当然であるでは、その〈国〉作りはどのようなものなのか。

オホクニヌシによる〈国〉作りについて『古事記』は詳細な記述をしていない。とくにスクナビコナと共に行われる〈国〉作りにいたつては、内容にいつさい触れず、スクナビコナは「常世国」へと渡つてしまう。なぜその内容に触れないのか、それは記述の必要性がなかったからと考えられる。つまり、オホクニヌシとスクナビコナによる

〈国〉作りの概念が当時、一般に共有されていたからではないだろうか。

次に、『古事記』以外の史料に表れたオホクニヌシ（オホナムズ）とスクナビコナの〈国〉作りをみてみたい。

（イ）夫の大己貴命と、少彦名命と、力を戮せ心を一にして、天下を経営る。復顕見蒼生及び畜産の為は、其の病を療むる方を定む。又、鳥獸・昆蟲の災異を攘はむが為は、其の禁厭むる法を定む（神代紀第八段一書六）

（ロ）天の下造らしし大神、大穴持命と須久奈比古命と、天の下を巡り行でましし時、稻種を此処に墮したまひき。故、種といふ（出雲国風土記飯石郡多禰の郷）

（ハ）大汝少御神の作らしし妹背の山を見らくしよしも（万葉集・巻七・一二五）

三例は、当時二神が〈国〉作りの神と認識されていたことを示すものだ。また、（イ）（ロ）で触れられているように、それは農耕に関わる〈国〉作りであつたと考えられる。次のような例もある。

（ニ）大汝命と少日子根命と二柱の神、神前の郡聖岡の里の生野の岑に在して、此の山を望み見て、のりたまひしく、「彼の山は、稻種を置くべし」と



のりたまひ（播磨国風土記揖保郡稻種山）

（ホ）少日子命、粟を蒔きたまひしに、莠実りて離々  
りき。即ち、粟に載りて、常世の国に弾かれ渡り  
ましき。故、粟嶋と云ふ（伯耆国風土記逸文）

オホアナムズとスクナビコナの行動は農耕と密接に関わ  
りをもつ。山田永が「つまり「国作り」といえば、古代に  
おいては一般にオホナムチ・スクナヒコの農耕にまつわる  
国作りのこととみなされていた」とする通りであろう。ま  
た、『古事記』においてスクナビコナをあらわしたクエビ  
コは「今には山田のそほど」とあり、つまり案山子であり、  
農耕に関わる存在である。

以上が古代の一般的な概念であるならば、オホアナムズ  
とスクナビコナの農耕地としての〈国〉作りを、オホクニ  
ヌシの別名にオホアナムズと名付けることで『古事記』の  
中に組み込んだと考えられよう。

また、オホクニヌシの別名「葦原色許男」は、前述した  
ように「葦原中国」の「葦原」である。つまり、同じ「葦  
原中国」をさす「豊葦原千秋長五百秋水穂国」「豊葦原水  
穂国」の「葦原」でもあるといえよう。それは稲穂のみず  
みずしく実る国という「葦原中国」を祝福する名称であり、  
「葦原色許男」の名前はその意味合いも背負うこととなる  
のだ。「葦原色許男」は実り豊かな〈国〉を表象する名前

ともいえるだろう。

オホクニヌシの〈国〉作りはイザナキ・イザナミによる  
〈国〉生みとは大きく異なるものだった。宣長は「経営成  
竟たまふは、大汝少名毘古那神のときなり」としていたが、  
イザナキ・イザナミの〈国〉作りは「経営」ではなく、国  
土となる〈国〉「生」みである。そして、オホクニヌシ・  
スクナビコナによる農耕地としての〈国〉作りがなされる。  
それはおおきくいえば、農耕を行える豊かな土地作り＝人  
の定住する豊かな土地作りととらえることもできる。

同じ行為とはいいがたい、この二つの〈国〉作りを繋ぐ  
ものが〈国〉自身であり、「別天つ神」カムムスヒの命令  
である。「天神諸命以」では「ただよへる国」が対象とな  
って「修理固成」が命じられる。それは将来「天下」とな  
る〈国〉である。一方、スクナビコナへのカムムスヒの  
「国を作り堅めむ」はオホアナムズやオホクニヌシでもな  
く「葦原色許男」との共同作業として命じられることから、  
その対象の〈国〉を後に「天下」となる「葦原中国」とし  
た。〈国〉作りの中心となるべきはその〈国〉自体なので  
ある。

『古事記』には「ただよへる国↓葦原中国↓天下」とい  
う〈国〉作りの流れが存在し、オホクニヌシの〈国〉作り  
は確かにその流れに組み込まれているのだ。ただし、オホ

クニヌシによる〈国〉作りは、イザナキ・イザナミが「ただよへる国」の「国土」を誕生させたものとは異なり、「天下」となるべき「葦原中国」の次の段階である、農耕地作り＝人の定住する土地作りとして組み込まれているということが重要なのである。それは、イザナキ・イザナミの〈国〉作りを受けて、次の〈国〉の段階へと導くための行為である。つまり「天下」の達成にむけて、オホクニヌシの〈国〉作りは組み込まれるのである。

#### 四、「葦原中国」という〈国〉作り

ここであらためて〈国〉作りの中心となる「葦原中国」をみてみたい。

- ①伊耶那岐命、桃子に告らさく、「汝、吾を助けしが如く、葦原中国に所有る、うつしき青人草の、苦しき瀬に落ちて患へ惚む時に、助くべし」
- ②故是に、天照大御神、見畏み、天の石屋の戸を開きて、刺しこもり坐しき。爾くして、高天原皆暗く、葦原中国悉く闇し。此に因りて常夜往きき
- ③吾が隠り坐すに因りて、天の原自ら闇く、亦、葦原中国も皆闇けむと以為ふに、何の由にか、天字受売は衆を為、亦、八百万の神は諸咲ふ
- ④天照大御神の出で坐しし時に、高天原と葦原中国と、

自ら照り明る

- ⑤此の葦原中国は、我が御子の知らさむ国と、言依して賜へる国ぞ。故、此の国に道速振る荒振る国つ神等が多た在るを以為ふに、是、何れの神を使はしてか言趣けむ

- ⑥葦原中国に遣せる天菩比神、久しく復奏さず。亦、何れの神を使はさば、吉けむ

- ⑦汝を葦原中国に使はせる所以は、其の国の荒振る神等を言趣け和せとぞ。何とかも八年に至るまで復奏さぬ

- ⑧天照大御神・高木神の命以て、問ひに使はせり。汝がうしはける葦原中国は、我が御子の知らさむ国と言依し賜ひき。故、汝が心は、奈何に

- ⑨（建御名方神）我が父大国主神の命に違はじ。八重事代主神の言に違はじ。此の葦原中国は、天つ神御子の命の随に献らむ

- ⑩（大国主神）僕が子等、二はしらの神が白す随に、僕は、違はじ。此の葦原中国は、命の随に既に献らむ

- ⑪故、建御雷神、返り参り上り、葦原中国を言向け和し平げつる状を復奏しき

- ⑫爾くして、天照大御神・高木神の命以て、太子正勝

吾勝々速日天忍穗耳命に詔ひしく、「今、葦原中国を平げ訖りぬと白す。故、言依し賜ひし隨に、降り坐して知らせ」とのりたまひき

⑬爾くして、日子番能邇々芸命の天降らむとする時に、天の八衢に居て、上は高天原を光し、下は葦原中国を光す神、是に有り

⑭天照大神・高木神の二柱の神の命以て、建御雷神を召して詔はく、「葦原中国は、いたくさやぎてありなり。我が御子等、平らかならず坐すらし

⑮其の葦原中国は、専ら汝が言向けたる国ぞ。故、汝建御雷神、降るべし

右は、『古事記』「葦原中国」全十五例である。この内、

①から⑬までが上巻にあり、⑭⑮は中巻のことだが、いずれも「高天原」や「高天原」に属する神の関与がある時に「葦原中国」が使用されていることに注目したい。宣長はこれをもって「高天原より云へる号」とした。「葦原中国」は確かに「高天原」からの言葉なのである。この「葦原中国」が中巻以降の「天下」へと繋がる世界であることはこれまで何度も述べてきた。そして、『古事記』上巻は「天下」の実現へと向けて、〈国〉作りという一大事業を推し進めていく。

しかし、一連の〈国〉作りの物語の中で、明確に「葦原

中国」や「天下」を作ると書いた物語はない。〈国〉作りの中で直接「葦原中国」という言葉を用いたものはみられず、文脈に依ることではしか作られていく〈国〉が「葦原中国」であることは判断されないものである。それは〈国〉作りの〈国〉に広い意味を持たせるためのものではなかったろうか。

第一節でみたように、古代「クニ」には多くの意味が含まれていた。『古事記』ではその意味をあえて規定しないことで、イザナキ・イザナミの〈国〉生み、オホクニヌシによる〈国〉作りまで、すべてを包括するのである。それは「ただよへる国」であり「葦原中国」であり、後の「天下」であった。

また、第三節でみたように、古代の一般的な概念としてのオホクニヌシ・スクナビコナの農耕地の〈国〉作りが組み込まれたということは、オホクニヌシによる〈国〉作りが『古事記』に必要だったということである。それはイザナキ・イザナミの〈国〉「生」みとは異なるが、「天下」となるために「葦原中国」には必要な行為だったのだ。それが、農耕の土地作りⅡ人の定住する土地作りである。

〈国〉は「ただよへる国」から段階を経て「天下」へとなっていく。最初「ただよへる国」だったものに、イザナキ・イザナミの〈国〉作りが加えられ「葦原中国」となっ

た。そして「葦原中国」にはオホクニヌシの〈国〉作りがあり、神武記において「天下」となる。イザナキ・イザナミとオホクニヌシによる〈国〉作りは、「葦原中国」が「天下」となる流れの中で、その国土や土地作りといったいわば〈国〉をその内部から形成するという意味で共通する行為といえよう。

また、その「葦原中国」から「天下」へという〈国〉の変化は、「天下」になることで「葦原中国」の役目を終了させることでもあり、それは「天皇」が配置されるまでとなる。「葦原中国」とは「天下」となる〈国〉の途中の状態、「天下」以前の状態をさす言葉であり、「天下」になつていく〈国〉作りの言葉なのだ。

そうであれば、「葦原中国」と〈国〉の単位で関わる〈異界〉との関係を考えないで済ますわけにはいかない。〈異界〉は、「葦原中国」と援助や断絶という空間的な関わりをもって〈国〉の外部に接触する<sup>19)</sup>。

たとえば、「黄泉国」「根之堅州国」では「黄泉比良坂」が「塞」がれ、「海原」も「海坂」が「塞」がれた。その世界間の往来が閉じられることで、「葦原中国」は生死の境目が明瞭になり、海に入っていくことができなくなった。これは「葦原中国」に住む「人草」にはなしえない行為であり、また人の住む空間としての「天下」となるには必要

不可欠な秩序である。これは、いわば〈異界〉による〈国〉作りといえよう。

「葦原中国」という〈国〉は「天下」になっていくことがその役目であり、その登場は「天下」の〈国〉作りが未然の状態であるとさし示すのである。

## 結

『古事記』上巻は「ただよへる国」の「修理固成」から始まる。冒頭に〈国〉作りを置くことで、『古事記』は〈国〉作りの位置を明確にした。それは〈国〉作りの重要さを物語ったはずだ。そして、「天下」であり「葦原中国」である〈国〉の「修理固成」を命じたことで、その範囲はイザナキ・イザナミによる〈国〉作りを越え、オホクニヌシの〈国〉作りをもその範疇に含んだ。そうして作られていく「葦原中国」は「天下」へと変化・進化していく〈国〉である。

また、〈国〉が規定されないことで、「葦原中国」の〈国〉作りには、イザナキ・イザナミでは国土、オホクニヌシは農耕地という、それぞれの〈国〉作りが含まれ、「天下」へと進化していくことが可能になった。それらは、いわば「葦原中国」という世界の内部を形成する行為である。

その〈国〉作りの一方で、「葦原中国」は様々な〈異界〉と接し、また、その往来が閉じられることで「天下」になるための秩序を手に入れた。つまり〈国〉の外部を形成したのが〈異界〉との関わりであった。「葦原中国」の〈国〉が空間レベルで〈異界〉と関わることもまた〈国〉作りのひとつなのだ。

「天つ神」のめざしたものは「天下」である。「葦原中国」とは「天下」へと進化する過程の〈国〉の名前に他ならず、その過程にある〈国〉が〈異界〉と関わることで外形を確立していくのである。同時に、イザナキ・イザナミ、オホクニヌシによって〈国〉の内部をも形成していく。

『古事記』上巻は二つの〈国〉作りを包含し、「天下」になる〈国〉の物語を語るのだ。そして、第一節でみてきたように、支配者を配置することで、その〈国〉を退場させるという「葦原中国」と〈異界〉の形式を、「葦原中国」と「天下」に組み込むことで、「葦原中国」を退場させ、文章の明示をしなくとも、〈国〉作りの終了を指し示した。『古事記』上巻は〈国〉作りの物語を語るが、それは〈国〉作りそのものである「葦原中国」という、「天下」未然の〈国〉の物語を語る装置ともなっていたのである。

## 注

(1) 『古事記』中「葦原」の使用は全二例。その内、「葦原中国」が一五例、「豊葦原千秋長五百秋水穗国」が二例、「豊葦原水穗国」が一例、「葦原色許男」が四例である。

(2) 本居宣長の引用は『本居宣長全集』（筑摩書房）による。なお、旧字は新字に改めた。また、本論でこれ以降に指摘する宣長の引用に関しては、全て(2)に同じ。

(3) 神野志隆光「古事記」「国作り」の文脈——修理「生」作」——『國語國文』第五八巻第三号 一九八九年

(4) 池辺弥「古代のクニ」『民俗学研究所紀要』第一集 一九七七年）は、固有名詞を冠した国を、「④国家、⑤国、⑥郡、⑦郷及び⑧その他」の五種類に分類する。また「地」「土」「洲」「郷」などがクニと訓読されている古写本が多く、クニという言葉のもつ概念に種々の漢字が使用されていたとす。このことから、古代においてクニの概念は多様であるという結論を得ている。

(5) 三貴子の一人であるツクヨミによるウケモチの神の殺害と、それによってもたらされた穀物の起源神話を語る。

月夜見尊、勅を受けて降ります。已に保食神の許に到りたまふ。保食神、乃ち首を廻して国に嚮ひしかば、口より飯出づ。又、海に嚮ひしかば、鰭の広・鰭の狭、亦口より出づ。又山に嚮ひしかば、毛の鹿・毛の柔、亦口より出づ。夫の品の物悉に備へて、百机に貯へて饗たてまつる。是の時に、月夜見尊、忿然り作色して曰く、「穢しきかな、鄙しきかな、寧そ口より吐れる物を以て、敢へて我に養ふべけむ」とのたまひて、廻ち剣を抜きて撃ち殺しつ。

(6) 拙論「日本神話における〈異界〉との関係性——「葦原中

「国」の世界観をめぐる——『京都語文』第十五号 二〇〇八年

(7) 注(3)に同じ。

(8) 山崎かおり「古事記『修理固成』の意義」『國學院大學大学院文学研究科論集』第二十五号 一九九八年

(9) 金井清一「古事記上巻『修理固成』の及ぶところ」『京都産業大学日本文化研究所紀要』第五号 二〇〇〇年

(10) 菅野雅雄「出雲系神話の構想——古事記構想の研究——」『大久間喜一郎博士古稀記念 古代伝承論』桜楓社 一九八七年

(11) 各論文の「修理固成」の範囲をまとめると次のようになる。

- ・天の沼矛を賜う……
- ・オノゴロ島の生成……菅野雅雄
- ・イザナキ・イザナミによる国生み／神生み……
- ・イザナキの黄泉の国訪問……
- ・アマテラスの出現……
- ・オホクニヌシの国作り……本居宣長、神野志隆光
- ・国譲り・天孫降臨……山崎かおり
- ・神武東征・天皇即位……
- ・歴代天皇の治世……金井清一（オホクニヌシの〈国〉作りは除く）

また、右に挙げた以外に山田孝雄「古事記上巻講義一」（国幣中社 一九四〇年）は、「命以」である点に着目し、「一切の活動の根本原理」として、その範囲を天沼矛を賜うまで、オノゴロ島を生むまで、大八洲を生むまで、アマテラスの出現まで、代々の天皇が国を治めるまでとしている。

(12) 「修理」の語義に関して、中川ゆかり「『修理』の語義をめ

ぐる」（『上代語と表記』おうふう 二〇〇〇年）がある。氏は「修理」の意味は、手直し以外に、建て直し・作り直しがあるとし、「イザナキ・イザナミの『修理固成』は国土の創造は意味しない。すでにある国の大規模な作り直しを言う」としている。

(13) 日本古典文学大系『古事記 祝詞』（岩波書店 一九五八年）は「ただよへる国」の説明に「毎月なす漂へる<sup>(14)</sup>国」を承けている」としている。その時点では「国土（人間生活の投影された土地）が、まだ十分成りとのわかないで」と説明し、国土が漂った状態をさすとしている。また、新潮日本古典集成『古事記』では（新潮社 一九七九年）は「ただよへる国」を「漂っている土地」とし、「修理固成」は「修理」は浮漂を整える、「固成」は若き土地を固め国土として完成すること」として、「修理固成」を国土に制限する。

(14) 注(3)に同じ。

(15) 注(8)に同じ。

(16) 注(9)に同じ。

(17) 山田永「古事記オホクニヌシの国作り神話の特色」『名城大学人文紀要』第七五集三九卷三号 二〇〇四年

(18) 新編日本古典文学全集『古事記』（小学館 一九九七年）「豊葦原千秋長五百秋水穂国」の頭注「葦原中国をいつまでも豊かな収穫の続く、みずみずしい稲穂ができる国として祝福する呼び方。「豊葦原」は葦原中国を指すと同時に、その国土のもつ盛んな生命力を象徴する」による。

(19) 注(6)に同じ。

「付記」『古事記』の引用は『新編日本古典文学全集 古事記』

（小学館 一九九七年）に依る。また、『風土記』『日本書紀』の引用は日本古典文学大系『風土記』（岩波書店 一九五八年）『日本書紀』（岩波書店 一九六七年）に依る。さらに、『万葉集』の引用は伊藤博校注『万葉集』（角川書店 一九八五年）に依った。

なお、適宜、旧字は新字に改めた。